



# ヨロロツパの旅

平井信義

バンバンバンと、子どもたちの玩具のピストルを打ち合う音が、戸外に反響している。謝肉祭（カーニバル）がやってきたのだ。

ドイツの二月の戸外は、殊の外寒さが酷しい。すっかり葉を落し切ってしまった木々の間をしみとおして、寒気は肌に刺し入ってくる。日中でも零下十度、朝晩は零下九六度にまで下降する日が続く。然し、子どもたちは至極元気だ。皮製の短いズボンをはいて、太ももまで出している。少し年のいった子どもは、その部分に黄金色の毛が輝いていることがあった。多くの子どもは、腰に二挺拳銃をさげ、つばの広い帽子をかぶり、中には黒いお面をつけている子どももいる。それぞれお得意のポーズで玩具のピストルを構えて、バンバンバンと打合っては駆け出していく。その一隊が通りすぎると、又別の一隊があらわれて、高い町並にピストルの音を反響させている。

私の下宿の三階に居る男の子も、今日はもう落付かない。勉強どころではないのだ。「ロルフ、ロルフ」とおもての通りから呼ぶ友達の声に、彼は窓をあけたらしい。「いますぐね」と声がして、乱暴に戸を閉める音がした。そのあと、行く行かないで母親とい争をしているらしい、三声四声が階下に洩れてきたが、間もなく階段をばたばたと駆け下りていった。

女の子も、めいめい衣裳を凝らしている。ピエロ姿の子どももいる。花嫁衣裳を着込んで、ベールをなびかせながら小刻みに歩き去っていく子もある。或いは女王のかぶるような冠をのせ、裏の赤い厚いマントを着て、まじめ顔で歩いて来る子どももいる。その顔は、もう子どもとは言えないほど大人びていて、胸のふくらみも外からわかるほどだ。

ドイツのカーニバルは、ケルンとマインツ及びミュンヘンが有名で、町をあげてのドンチャン騒ぎをするという。私のいるフランクフルトのものは、それらに較べるとお話にならないほど規模が小さ

いと下宿のお年寄りがいっていたが、それでも東洋人の私には目新しかった。

その晩、私は孤児の収容施設の招待に出かけていった。その施設は、孤児の施設といっても既に多くの子どもが職業についているか、職業学校に通っている少女たちである。その所長さんのレンニツ氏と懇意になっていたので、是非来て、その娘たちと踊ってくれというわけなのだ。

この日ばかりは、夜を徹して踊るならわしであり、しかも、どの女性に接吻してもよいのだそうだ。その構えもよろしく、私が会場についたときは、それぞれの衣裳を着た乙女たちが、顔も誰か見分けのつかぬ程に色を塗ったり、或いは仮面をかぶって、ダンスミュージックに合わせて踊っていた。ふだんの食堂がホールにかわったその室は、むしろ人でぎっしり詰まっているという感じで、自分のいる位置を決めるためにも、踊っている人たちの間を抜かなければならないほど狭かった。青春のいきれであろうか、むっとのぼせるほど室があつい。私は圧倒されたように、入口のところ立っただけのまま、男女の組みがもつれ合って踊るのを眺めていた。

次のワルツが始った。一たん離れていた女と男が、再び組を作って踊り始めた。そのとき、一人の素顔の女の子が、笑顔を作って私の方に寄ってきて「踊っていただけませんか？」ときいた。本来なら、女の子の方から申込むなどという法はないのだが、この室では女の子の方がずっと余っている。中には女の子同士組んで踊っているものもある位だ。私はお辞儀をして早速その子に応じた。

背が比較的到低い金髪の少女で、目を見合せたときには、彼女のひとみの青く澄んでいるのに驚いた。彼女の背中から右手を回して踊り始めるとすぐに彼女が口をきった。「日本からいらしたのですね」「ええ、もう四ヶ月になります」日本で、きれいなお国できていますけれど」「自然はきれいですよ、海辺が沢山あって」「いってみたいわ」——その子は、私の顔を射るように見てから、その目差を微笑の中に消した。

「貴女がいらしたら歓迎しますよ」私が答えると「そうねえ、でも行く機会なんかありそうにないわ」と彼女は口をつぐんだ。鼻筋から両頬にかけて点々と散っているそばかすが、面長い顔に淋しさの影を作り、それが却って彼女を美しくしている。

「貴女はどこで生れたんですか？」今度は私の方から口をきいた。「黒海の岸で。やはり美しい海辺があったの。でも今はもう、ソビエツト兵が大勢いる地区ですわ。そこで私は、母を残して家族全部を失ってしまったのです。」彼女は、私の手を握りしめるようにしていった。「でも今夜はそのことを思い出すの、よしませうね。」振りさるよう言って、再びしっかりとステップをふんだ。

急にワルツが早くなった。隣と隣とがぶつかり合いながら、ホールはどんどん溢き立ってくる。若い二人の組合せの何組かは、感極まったように抱き合って、目まぐるしく踊り回る全体の動きの中央に位置を占めて小さなステップを踏んでいた。

二つの曲を踊ると、私はすっかり汗ばんだ。その女の子の額にも、高い鼻の頭にも細い汗の玉が光っている。「少し休みましよう

ね」私はその女の子の手を引いてホールの裏の口の方にいった。扉をひらくと、冷たい空気が襟元から背中に通い入ってくる。「いい気持ね。」とその子はいった。「汗をかいているから、寒くありませんか？」と私がきくと、「いいえ、とてもいい気持よ」と彼女はいつて、ピンク色の薄手のハンケチを出して、首に巻いた。

二人はしばらく空を見上げた。月のない晩で、満天の星が、濃い暗闇の奥深く簇め込まれたように輝いていた。その輝きの幾つかは、更に遠くに吸い込まれるように弱くなると、忽ちもとの輝きに立ち返ってくる、——そうしたきらめきを繰返していた。二人は黙って空に向けた目を離さなかった。

謝肉祭のあと、この日のことを私はしばしば思い出した。日本に帰って来ても、ドイツの記事を見るたびに、よくこの子を思い出した。東と西に別れているいまのドイツの運命を、その子が重く背負っているような感じがして、その子のこれからの運命を通じて、ドイツの幸いを祈らずにはいられなかった。

## (二)

謝肉祭が終わってから間もなく、私は「精神紀生より見たる家庭と学校」という題の討議会に臨むために、マールブルクにいった。そこに約一週間滞在してから、オーストリア・北イタリー・スイス・フランスと、第一回の一人旅に出た。

貧乏学者の三等旅行は、オーストリアの首都ウィーンに始まる。最低の旅費で旅をするのであるから、宿も行った先口で最も安いホ

テルを見付けなくてはならない。タクシーを使うとお金がかかるので、市電かバスを利用するか、自らの足を使うより他はない。私は汽車を降りると、すぐに駅の売店でその都会の地図を買うことにした。地図も一つの地図の中に、街の名と交通系路がついているものを選ぶ必要がある。あれこれと選んでいると、親切に教えてくれる売娘もいるし、全く無愛想な娘やおつさんにも出会った。

地図を買うと私は必ず駅の喫茶店へ入った。そして一杯のコーヒーに渴をいやしながら、地図を隅から隅まで丹念に見て、主だった街の名とか名所の在り場処とかの他に、交通網をおぼえてしまうのである。三十分位でその見当がつく場合もあるが、一時間以上もそうしてにらめっこしていいないと、なかなか様子が呑み込めない町もあった。

こうして三等旅行には、苦勞のいることが多かったし、或るときは危くだまされかけたこともある。然し、三等旅行は日本でも車中の友だちが出来易いように、庶民と話をする機会に恵まれる。言葉の通じない国々でも、顔をしかめたり指や手を使うと、結構用が足りることを知った。

又、市内でも電車、バスは、親子の様子を見たり、紳士淑女の行動を偵察するには、非常に都合がよかった。道を聞いたり名所の説明をきいたり——見知らぬ人から非常に親切な扱いをうけることもあった。と、所が、全くデタラメを教えられたり、その教え方も不親切であったり、ずい分様々な目に会ったものである。しかし、そうした経験を通じて、その国々の人たちの動きを幾分でも知ること

が出来たのは、非常によかった。

町角で地図を掲げていると、どこからともなく人が二、三人寄ってきて「何処を訪ねようとしているのですか」と親切に聞いてくれる場合もあったし、会う人ごとがそうした親切な人々ばかりであった国がある。例えばスエーデンなどは、その点、私の心を暖めてくれる機会が多くあった。

どこにいても殆ど無愛想であった国はイタリーであり、漸く教えてくれた人もデララメを覚えてくれたので飛んでもない方角にいて迷いに迷ったこともある。一回は、親切そうに寄って来た男を半ば信頼してついていった処、公園の真中につれていかれ、デンスケ賭博を強制されて、一目散に逃げたのもイタリーでの出来ごとであった。

しかし、イタリーでもナポリからボンベイに行く途中、私には全く理解のできないイタリー語の人たちに取巻かれ、あれこれと車中からの風景を説明してくれる親切な態度に、つい合槌を打たなければならなかった経験が頬笑ましく思い出される。その中の一人が、わざわざ駅からボンベイの廃虚まで連れて行ってくれた。そして、私が差出した百リラのお金を頑強に断って、自分の胸のところに手でハートの形を描き「自分の親切を感じてくれればよいのだ」という様子を示してくれたのは、何よりの旅情を慰める糧となった。

旅情はいつも淋しさと不安がつきまとうものである。しかし、そのとき受けた身知らぬ人々のやさしい扱いは、その後度々思い出された。

私はこうした一人旅のさ中に、よく芭蕉の奥の細道を鮑から取り出した。私が故国を去るとき恩師齋藤文雄先生から頂いた岩波文庫版のそれをベンチに腰を下して読みながら、涙ぐむことさえあった。

○久保貞次郎編「色彩の心理」(三〇〇円) 大日本出版

色ずりの絵が沢山入った美しい書物である。家庭の抑圧をうけた子ども、社会の抑圧をうけた子ども、肉体的な故障をもった子ども、いろいろな例について、多くの事例が載せられている。かなり極端な例を集めてあるので、面白い。ただし、うがちすぎている点がないでもない。一人の子どもについて何枚も絵が紹介されているのが興味深い。

○福井研介編訳「幼児のあそび」——指導とその記録、三一書房

現代ソビエトにおける幼児保育の内容を知るのに好個の材料であり、興味深い。(二六〇円)